



進修同窓会HPにアクセス

## 旅客船「さつき丸」

水郷観光汽船は、1932〔昭和7〕年にディーゼルエンジンを搭載した鋼鉄旅客船「さつき丸」と「あやめ丸」との2隻を霞ヶ浦に就航させました。中でも、「さつき丸」は、2基のディーゼルエンジンと2軸のスクリュウとを備え、総トン数は155トン。喫水(船舶が水上にある際に船体が沈み深さ。即ち、水面から船体の一番下までの垂直距離)の浅い船としては、本邦最大級で、長さ50m(戦後30mに短縮された)、一部3階建てで、「霞ヶ浦の女王」・「水郷の女王」と呼ばれました。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、引用文中の【 】内は筆者による注記です。



「あやめ丸」(右上)と「さつき丸」(左下)

## 昭和初期の霞ヶ浦航路

通運丸を続々と就航させ、関東の河川航路に覇を唱えた内国通運も、鉄道網の発達という時代の流れには勝てず、1919〔大正8〕年には、通運丸事業(船舶と航路権)を東京通船に売却し、川での汽船事業からは撤退しました。通運丸や乗組員をそのまま引き継いだ東京通船は、1929〔昭和4〕年に、社名を「東京通運」と変更し、利根川上流からは撤退。翌年、行徳航路を分離し、銚子汽船(後の銚子通運)と共に、霞ヶ浦と利根川下流域とを結ぶ短・中距離航路に活路を見出だすこととなりました。

1926〔大正15〕年8月に、自社路線(後の関東鉄道銚田線)を浜(現行方市浜)まで延伸させていた鹿島参宮鉄道が、1927〔昭和2〕年5月、汽船「参宮丸」・「霞丸」・「鹿島丸」による、浜・麻生・牛堀・潮来・鹿島大船津間の営業を開始しました。これに対し、東京通運は、1931年に、9隻の船舶を現物出資して「水郷遊覧汽船」を設立し、土浦・鹿島大船津間の航路権を譲渡します。水郷遊覧汽船は、同年10月に鹿島参宮鉄道船舶部門を買収し、翌年には社名を水郷観光汽船に変更し、ディーゼルエンジン搭載の鋼鉄船「さつき丸」と「あやめ丸」とを就航させました。水郷観光汽船は、急行船を主として、以下の航路を設けています。

- ① 土浦(一部は、沖宿・牛渡・有河寄港)麻生・潮来・大船津(鹿島)
- ② 佐原・牛堀
- ③ 佐原・十六島・潮来・大船津
- ④ 浜・麻生・牛堀・潮来・大船津

一方、東京通運と銚子通運が合併した銚子合同汽船は、各港寄港の⑤銚子・東京・銚子・土浦 ⑦銚子・高浜 ⑧銚子・銚田間の緩行船を就航させていました。その他、江戸崎と土浦とを結ぶローカル便を運行する会社もありました。しかし、④の浜・大船津航路は1932年頃、銚子合同汽船の⑤銚子・東京航路は1933年

に、⑥銚子・土浦 ⑦銚子・高浜 ⑧銚子・銚田の航路も、程なく廃止となり、戦時中には、水郷観光汽船の船も一部微用され、便数も激減しました。

## さつき丸

「さつき丸」が就航した1932年の初夏、土浦中学でも、早速、この船を利用して、校長以下、全校で「鹿島行」を実施しています。1932年11月発行『進修第36号』に掲載されている4年生の作文で、その行程を辿ってみます。

「静かな湖上」4年秋元輝夫【中33回】

「雨が降り、雨が降りして、待ちに待った我等の鹿島行き、其れは遂に輝かしい朝、希望に満ちた朝、晴れやかな朝となつて我等若人を迎へた。

我等は此の清き空気を吸ひ、此のすがすがしく生々とした周囲の風景を讚美しながら乗船した。汽船は思つたより大きく、我等全校生徒【当時の生徒定員は700名であった】を一口に腹の中にをさめてしまった。……」

「湖上を行く」4年赤根宏【中33回】

「ジャン・ジャン……警鐘を鳴らしながら名にし負ふ『サツキ丸』は湖畔をはなれた。一日千秋の思ひで、来る日も来る日も楽しみにしてゐた鹿島行は、いよいよ今日決行せられる事になつたのだ。

亀城七百の若人をのせて船はゆる／＼と湖上をうねつて行く。微動だにもしない快い気持ちに僕は自分の存在をも忘れて四圍の景色に恍惚として居た。東に見える航空隊の水上飛行機は、からりと晴れ渡つた初夏の青空を我が物顔に悠々と飛びまはつてゐる。その軽快なプロペラの音を聞いて居ると、僕等までが機上の人の様な感じがする。男性的な波の音。一つとして物にこだはらない軽快なプロペラの音。あゝ実に痛快な極みである。別けて飛沫を上げて着水するのを見た時に、陸上でならまだしも、湖上での眺めは何と

言つてよいか実に言語に絶してゐる。僕の視界には自然界のあらゆるものが、丁度活動写真の様に次から次へと転回されて行き、見る物みな若人の血潮を湧き立たせないものはない。雷気満ちあふれて、天の一角より黒雲のむく／＼と湧き立つが如く、亦大海原をうねる大波の如く、否それにも勝つて湧き起つて来る体中の何物かをどうすることも出来ない。すつかり大自然の偉大さに取り囲まれてもはや逃れることが出来なくなつて了つたのだ。又してもプロペラの軽快な音が頭上をかすめ飛んで行く。湖も青い。空も青い。その中で飛行機がとんぼがへりをする。――朗らかだ。」

出航すると、訓練中の霞ヶ浦海軍航空隊水上班の水上機が飛来。生徒たちが飛行機が見える右側に寄つたために、右舷が傾斜して、船縁の水が洗うほどでしたが、生徒たちの目は水上機に釘付けとなりました。

「船の中」4年櫻井武雄【中33回】

「船は鏡のごとき水面を気持よく進む。南を見ると航空隊の水上機が水煙をたてて、上つたり下りたりして、その壮観は口舌につくされぬ。中には我々の頭上をかすめて飛び去るものもあつた。その中に三機が一機を追うてやつてきた。それで船長がこれは一機の後に袋のやうなものをつりつけて、後の三機がこれを追うて機関銃でうつつ、練習をしてゐるのだと説明してくれた。……」

しばらくすると、のどかな湖上の風景に退屈を覚えたのか、いたづらを試みる者も出てきます。

「船中の雑景」4年飯塚均【中33回】

「……、丁度、三、四人、サイダー瓶を真中に何か紙片に書いてゐる。僕はソツと覗いて見た。何か遺書らしいものを書いてゐる。たしか瓶に入れて、水に投げられるらしい。『良いぞ』声の主は緑の瓶を肩越しにボンと投げた。投げられた瓶は波にかぶせられて、泡の中にポツカリ浮い

た。其の上を轟音と共に飛行機の影がさつと黒くさした。見上げる者二、三台演習をしてゐる。一台の尾端に赤いものがついたのを他の機が追つてゐる。『銀翼光る爆撃機』と云ふ歌が、のどからあふれ出た。……。」

「さつき丸」は三叉沖を過ぎ、霞ヶ浦を縦断。牛堀から潮来を経て、鹿島大船津に向かいます。

「船上にて」4年大沼純一【中33回】  
「……、一時間後船は真菰の生えた細い水路に入つてゐた。水郷の子等が人懐しげな目をして対岸より手をあげて何か叫んでゐる。何だか涙ぐましい気持になつた。日は照り、笠を冠つた田植人が腰をのびし、矢張僕等の船を見てゐた。一面は金波、銀波である広い水路に出た時僕は船内に入つて休んでゐた。」

エンチンをはかりなく響き、我等の汽船はすべるが如くひとり動いてゐた。」  
さつき丸が鹿島大船津の小さな棧橋に接岸すると、5年生から次々と上陸し、長蛇の列となつて鹿島神宮へ向かいます。途中、藤原鎌足の生誕地とされる所や古刹根本寺を拝観。しばらくして大鳥居の前に至り、側の広場に集合すると、丁度、新任の茨城県知事阿部嘉七閣下が参拝中であつたので、生徒たちは閣下にご挨拶を申し上げ、その後、神前にぬかずいて武運の長久を祈願し、校長先生が玉串を奉奠されました。参拝後、鹿島の名所である、御手洗、要石、佐久良東雄が寄進した桜(東雄櫻)、塚原ト伝碑を見学し、汽船に戻り、帰途に就きました。

その後も、土浦中学では、遠足で水郷観光汽船を利用していたようですが、戦前では、1941「昭和16」年に2年生200名が「あやめ丸」を利用したのが、最後となりました(1942年2月発行「進修第45号」「鹿島行き」2乙佐藤清【中44回】)。

なお、「さつき丸」は、戦時中に徴用され、輸送船・病院船として沖繩などの戦地に赴きました。1階の窓を全てベニヤ

板で塞ぎ、船底にコンクリートを流して重心を下げ、「女王」とは程遠い姿で太平洋を渡つたと言います。内地へ向けての航行中に機銃掃射を受け、上階部分は原形を留めない程の無残な姿で、霞ヶ浦に戻つて来ました。

### 戦後の霞ヶ浦航路

戦後、市民生活が落ち着くと、水郷観光汽船は、水泳客(注)や水郷観光を目的とした航路を設定しましたが、やがて経営不振に陥り、1952「昭和27」年に、「あやめ丸」を三重県鳥羽の観光船会社に売却すると、バスを運行していた水郷観光を合併。新たに大型バス6台を購入して、「水郷観光交通」を設立しました。水陸両交通の連携が功を奏し、息を吹き返した水郷観光交通は、1965「昭和40」年、「水郷汽船株式会社」と社名を変更し、バス会社とは経営を別にし、「さつき丸」・「やよい丸」・「うきしま丸」・「かすみ丸」、土浦⇨潮来間を僅か1時間20分で走る「快速あやめ丸」、鋼鉄船の「新かしま丸」などを運航し、戦後の束の間の最盛期を迎えました。この頃の定期航路は、水泳客を優先するため、土浦⇨浮島⇨麻生⇨牛堀⇨潮来と、牛堀から佐原市の閘門までとなつていました。



「さつき丸」に乗船する高14回生(土浦港) 1961【昭和36】年(高14回卒業アルバム)

土浦一高でも春の遠足で、水郷汽船を何度か利用しています。高19回生3年次の1966「昭和41」年の遠足では、「さつき丸」を利用し、鹿島まで出向いています。天気晴朗にして波静かなる湖面ではありましたが、何故か、「船酔い」で赤ら顔の生徒が何人も出現したと伝えられています。水郷汽船の利用は、翌年に高20回生が潮来まで乗つて、鹿島・香取に出向いたのが最後となりました。

水泳客や遊覧客で賑わつていた水郷汽船でしたが、湖岸の道路が整備されると、客を次第にバスに奪われていきました。さらに、1967年頃からは、大腸菌が増加するなど、霞ヶ浦の汚濁が顕在化し、1973年夏には、アオコが初めて異常発生しました。このため、各水泳場は、次々と遊泳不適となり、1969年、浮島の「水の家水泳場」が廃止されると、客足は急速に衰え、最後まで残つた歩崎水泳場が1974年に閉鎖されると、翌年の9月30日の潮来発土浦行きを最後に、霞ヶ浦航路は、百有余年の歴史の幕を閉じました。

霞ヶ浦には、霞ヶ浦航路の他に、田伏⇨高須、柏崎⇨浜などの、各地に渡船が存在しており、高度経済成長期の1965年には、出島村柏崎(現かすみがうら市柏崎)と玉造町浜(現行方市浜)とを結ぶ県営渡船「出島丸」が就航しました。当初は、木造船で一日往復7ないし8便が、無料で運航されてきました。



県営渡船「出島丸」

柏崎から自転車積み玉造工高へ通学する生徒や、鹿島参宮鉄道浜駅から石岡へ通う人たちが、港は朝から「こつた返し」悪天候で船が遅延した時には、「遅刻」にはなりませんでした。しかし、1987「昭和62」年3月3日に霞ヶ浦大橋が開通すると、同日17時10分柏崎発を最後に廃止となりました。



浮島水泳場と棧橋  
棧橋の先端に水郷汽船の船が見える

### (注)水泳客(霞ヶ浦の湖水浴場)

霞ヶ浦は、沿岸の子もたちにとっては、砂浜があればどこであろうと水泳場であったが、霞ヶ浦に本格的なレジャー用水泳場が開設されたのは、大正末から昭和の初めとされている。当時の霞ヶ浦は泳ぐことのできる綺麗な湖で、その水は飲料水としても用いられ、井戸水より美味しいとも言われていた。また、水泳が可能だということは、水が綺麗なだけでなく、湖岸と湖底の地形と地質も水泳場に適していたからである。主な水泳場としては、出島村の歩崎、玉造町(現行方市の桃浦・高須、麻生町(現行方市の天王崎、牛堀町(現潮来市)の鳴津、桜川村(現稲敷市)の浮島、美浦村の木原・大山、土浦市の神林・大岩田などが挙げられ、浮島・天王崎・歩崎・桃浦などには、脱衣所シャワー・売店などが設けられていた。また浮島には、湖岸に茅葺きのバンガローが建ち並んでいたが、遠浅のため水郷汽船は接岸できず、100mほどの棧橋が沖に向かって延びていた。

### 参考文献

『図説・川の上の近代―通運丸と関東の川蒸気船交通史―』川蒸気合同実行委員会編  
『通運丸と江戸川の水運』江戸川区立図書館/デジタルアーカイブ  
「霞ヶ浦の航路と水郷汽船」調査船ガイア船長 大久保裕司